



発行日 2008年4月20日 発行人 福島伸悦

編集責任者 浅井宣亮 編集担当 さとうのり、菅原研洲

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: http://www.soto-zen.net/

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.37



雪の安泰寺

CONTENTS

●巻頭 「包括主義」	駒澤大学名誉教授 奈良 康明	1
●S Z I 国際布教支援金運用報告 ～受給者レポート～	安泰寺 ネルケ無方	2
●特集 2008年度総会・講演会報告		
S Z I 創立15周年記念講演会「禅の発想のすずめ」講演録	（勸喝破道場・報四恩精舎 野田 大燈	4
2008年度総会議事録と報告・2007年度決算報告・2008年度予算報告・2007年度事業報告・2008年度事業計画	・	6
●海外レポート①Sanshin Zen Community: 三心寺	北アメリカ国際布教師 奥村 正博	10
②ダイフクジ・ソートー・ミッション	ハワイ・コナ大福寺法務担当 中出 慈光	12
③ロサンゼルス禅宗寺 茶筌供養	S Z I 事務局員 細川 浩代	13
④中国・ハルビン「侵華日軍第七三一部隊遺跡」訪問記	S Z I 事務局員 太田 賢孝	14
●国内レポート①ビルマ僧侶座談会「希望を捨てず！」	曹洞宗総合研究センター研究員 丸山 劫外	15
②全日本仏教徒会議神奈川大会報告 ～ダライ・ラマ14世法王講演録～	S Z I 事務局員 亀野 哲也	16
●特集 宗教間対話研究所月例研究会報告 2007年10月～2008年2月		18
●訃報／海外「宗立専門僧堂」について		21
●国内インフォメーション 元開教師・国際布教師OB親睦会開催／塔婆供養で植林支援		22
●SZI express 会費納入単・動静報告・HPのお知らせ・編集後記		23
●キャンドルナイト in 大船観音・S Z I 創立15周年記念シンポジウム・両大本山ワークショップのお知らせ		24

巻頭

「包括主義」

駒澤大学名誉教授 奈良 康明



対話の時代である。

およそ異宗教が出会った時、平和裡に友好関係が築かれたことはない。日本にキリスト教が伝播した時でも、また東南アジアにキリスト教が布教された際にも、伝統的な宗教者との対論、激論は報告されているが、いずれも、愚にもつかない悪口の言い合いに終始した歴史がある。

今日では異宗教者が、とにかく、一堂に会して共に祈りを捧げ、平和を祈念するところまで来ている。対話の必要性、重要性は増すばかりである。

私はクリスチャンの方とのある対話集会に40数年関わっているが、対話とは「相互理解」と「自己変革」をもたらすものだと考えている。仏教徒はあくまでもよき仏教徒たるべく、クリスチャンはあくまでもよきクリス

チャンであることに徹して、誠実に、人間の問題、社会の諸問題を話し合っていく時、それぞれの信仰の奥底で互いにならずき合うものを共有することが出来る。それが真の相互理解だし、自己の信仰生活をあらためて見直すことにも連なる。

対話に関し「包括主義」(Inclusivism)ということがよく言われる。たとえば、キリスト者が他宗教の深い宗教性を見た時に、「素晴らしい、それこそが我々の霊性なのだ」と自分の信仰に引き込んで評価するようなものである。禅にも同じ姿勢がないわけではない。「禅は仏教であって仏教を超える。世界の宗教の心髄はみな禅である。」と言った禅者もいる。なんで他宗教の素晴らしさはそれなりに認められないのだろうか。

そこに宗教「ナショナリズム」が垣間見えるのだが、この傾向は禅よりはキリスト教に根強い。今後の仏教とキリスト教の対話において、考慮すべき問題だと思う。

「安泰寺での修行生活とその諸問題について」

安泰寺堂頭 ネルケ無方^{む ほう}

■ 私の安泰寺への道

私が仏門に入るきっかけは、ドイツの高校の坐禅サークルだった。7歳の時に母親を亡くしてから「人は何のために生き死にするのか」「人生の意味とは」「本当の私とは」…というような疑問を抱いていたが、その答えを頭の中でいくら追い求めても見つからなかった。『身体』という生命現象がまずここにあるという事実には、全く気付かなかった。しかし、初めて足を組み、背骨を伸ばし、あごを引いた時、そこにはいつもと違う自分がいて、いつもとは違う世界が見えていた。自分が佇んでいた頭の中の世界から現実への出口が見つかり、より広い世界が見えてきた。

大学を卒業するまで、ずっと坐禅道場に通い続けた。1990年に1年休学して、半年間は京都大学で学び半年間は安泰寺で参禅した。当時住職の宮浦信雄老師の最初の言葉は今も記憶に新しい、「安泰寺をオマエが創るのだ!」。

大学を卒業してから正式に入門したが、2年で挫折を味わった。僧堂式の上下関係に、なかなかなじめない。国に帰ることも考えたが、「臨済宗にでも行ってこい」と先輩に勧められ、京都の東福僧堂に安居した。さらに1年小浜の発心寺に安居した後、師匠の許に戻った。自分の甘さに気付く、生半可な「自分探し」はその時点で終わっていたが、師匠に大きな問題を突きつけられた。「寺に金はない。どうやって生活するか、各自で考えて提案し実行に移すこと。托鉢以外のことをやってもいい」と。結局この公案に答えられなくて、2001年9月に下山し、大阪城公園でホームレス生活に入った。ブルーシートを張りながら毎朝坐禅会を開いた。が、その冬に師匠が除雪中事故死し、寺に呼び戻された。今私は、9代目の住職である。

■ 差定

安泰寺の差定は如常と摂心とで二通りある。摂心も如常も振鈴は3時45分、止静は4時より。如常の日は搭袈裟は6時10分、続いて粥座、伽藍の掃除、7時30分より作務。12時に斎座、15時まで作務。15時30分より入浴、17時に薬石。17時30分に茶礼（ティー・ミーティング）、18時～20時まで坐禅。摂心の場合（毎月、5日摂心は1回、1日摂心は4回）、4時～21時まで15回の坐禅、9時と15時に2回の食事。

坐禅の時間は年間実質1,800時間、自給自足のための労

働は約800時間、展鉢は約400時間、輪講（お経の勉強会）200時間、掃除150時間などである。朝課や晩課は基本として行っておらず、日常の読経は行鉢念誦、搭袈裟偈、開経偈、四弘誓願など、1年中の法事は三仏忌にとどめている。

この差定は微細なところは調整することがあっても、30年来ほとんど変わっていない。

■ 現実問題の数々

（1）経済

托鉢に頼らないで寺を支えていくのは現時点では無理である。1年のうち約2～3週間は寺の全員を連れて京阪神方面の遠鉢に出掛ける。寺の出費は年間120万円～180万円ほどあるが、その1/3は托鉢、1/3は参禅者からのお布施、1/3は縁のある寺院でのお盆の棚経の手伝いで賄っている。出費の中身は電気代、燃料、機械類の購入と修理、自給できない典座の材料、曹洞宗宗費、車検、電話代などである。支援金もこれに当てている。現実問題として、30年前に建てられた伽藍は雪国の気候に適しておらず、毎年の豪雪で屋根や壁が傷んでいる。雨漏りや落ちた城壁を直すのは修行の一環となっているが、向こう10年間で大幅な修復の必要性を感じている。そのための積立がないので、今後インターネット上で呼びかけてみたいと思っている。

（2）叢林内のコミュニケーション

修行者の多くは日本語が全く話せない。同じ仏道を目指しながら一緒に生活しているのに、一つの寺の中で「外国人組」と「日本人組」が出来てしまい、互いにコミュニケーションがとれない場合がしばしばだ。そこで2年前から「Japanese English Conversation（日英会話）」なるものを提案した。週に1回、地域の方々も交えて、前半は英





語、後半はニホンゴでコミュニケーションをとり、楽しく時間を過ごそうというのが狙いだ（無論、参加費無料）。ところが地域からの参加者はほとんどいなかった。寺の内部だけではなく、寺と地域との相互理解も高めなければならぬため、去年から16キロ離れた廃業になったパチンコ屋を借りて、毎週日曜日に町まで下りることになった。

（3）弟子の育成

参禅者ばかりでは、寺の運営はできない。無論、得度したばかりの雲水だけでも何もできない。少なくとも「先ず3年」いてもらわなければ戦力にもならないし、3年間寺にいたとしても、何のために自分が安泰寺に来たのか、ここで何の修行をしようとしているのか、という問いかけが最初からなければ、無駄に時間が流れてしまうだけだ。「安泰寺をオレが創る」と「オレはどうでもいい」という大人の姿勢も要求される。しかし残念ながら、1ヵ月経てば、寺のメンバーの半数は入れ替わってしまう。1年もたてば、全員が変わることもある。先日教えていたことを今日再び教えなければならない。簡単に任せられない仕事もあるが、全部を住職自身がやるわけにもいかない。結局まだ半年しか寺にいない参禅者が重要な責任を持つようになる。そのために大きく背伸びする者もいれば、その重圧でつぶれてしまう者もある。2009年から一般参禅者に春から夏にかけての100日間だけ門戸を開き、7月から3月までは3年以上安居するつもりで来た人だけを置くことを考えている。

（4）家庭と叢林

もう一つの課題は、安泰寺住職の家族の立場である。寺と家族を一緒にしてしまうと、普通の世襲制の寺のようになり、僧堂の雰囲気なくなってしまう。実際問題として、朝3時45分の振鈴から夜8時の夜坐が終わるまで、私が家族と顔を合わせる時間はあまりない。逆に、私から「袈裟の着け方があまりにもだらしない」と怒られて、「堂頭は家庭を持っているから、袈裟の正しい着け方を教えてもらいたくても聞きにいけないじゃないか」と寺を出た弟子もいる。家庭は叢林からお父さんを、叢林は私の家庭から堂頭を取られていると思うらしい。仏道修行のため全てを捧げたいという気分だが、自分の家族すら幸せに出来なければ、何が仏道修行かという疑問もある。じっくり悩む

しかない問題かもしれないが、『知事清規』の中にもその答えを見つけることはできなかった。安泰寺の三代前の住職の代から妻帯となったが、今までその正しいあり方の実践見本が見受けられない気がする。「大人に育つ・育てる」と「家庭を持つ」という私の二つの問題は決して二つではなく、一つの問題なのである。

■ 参禅者

安泰寺では短期参禅者と長期の安居者を厳密に分けておらず、その時寺にいる者全てを「修行者」と見なしている。参禅期間が長引いて、そのまま出家得度した人も大勢いるし、安泰寺の堂頭は「参禅者の成れの果て」というのが普通である。1年には100～150人の参禅者が訪れている。日本人と外国人はだいたい半々だが、日本人の平均滞在時間が1週間なのに対して、外国人は1ヵ月以上いる者が多く、実際に寺にいる者の3/4が外国人であることが普通だ。ヨーロッパ人が最も多く、北米・南米、オーストラリアからも参禅者はたくさん来る。その窓口となっているのは寺の8ヵ国語によるホームページである。アジア圏では台湾、タイ、バングラデシュ、スリランカから南方仏教の僧侶も来ておられるが、ビザの取得の問題がある。山内ではいつの間にか英語が共通語になってしまった。

彼らのほとんどの参禅の目的は坐禅にあり、形式に興味を示さない者が多い。安泰寺も決して形式に拘っているわけではないが、『永平清規』などの精神を重視しているため、彼らに形式の中で本来表現されるべき心を理解させることに苦心している面もある。日本人の参禅者の中には外国人と違い、僧侶の道を就職に変わる一つの進路と勘違いしたり、精神療法を求めたり、また親から寺に送られてきたりする者すらいるが、寺として一緒に生活したい者ならたった一人でも拒まない方針を貫いている。



安泰寺は1924年開山。1977年に京都洛北より兵庫県久斗山に移転。冬季は2メートルを超える積雪があり、冬安居中の入下山は不可能になっている

特集 2008年度総会・講演会報告

SZI 創立15周年記念講演会
「禅的発想のすすめ」財団法人「喝破道場」理事長・宗教法人「報四恩精舎」住職 野田大燈^{の だ だい とう}

【(財) 喝破道場「若者自立塾」とは?】

不登校・ニート・ひきこもりの自立支援に30年以上の実績を持つ団体。「禅」を心の拠り所に、自給自足の生活をベースとした集団生活の中で指導を行っている。厚生労働省の委託実施事業。香川県高松市の五色台にあり、宗教法人・社会福祉法人・財団法人を運営する四恩グループの活動のうちの一つ。

無一物からの出発

私が出家をしてから33年になります。宗教とはまったく縁のないところにおりましたが、ある曹洞宗の禅僧に出会い、一目ぼれをし、私も曹洞宗のお坊さんになりました。大きな仏縁であり、非常に感謝いたしております。何も分からない世界から修行にまいりましたが、それまで持っていたお坊さんに関する知識と現実はあまりにも違いました。周りにはお寺を継ぐものが大半な中、私には継ぐ寺がありませんでした。「坊さんとは何なのだろう?」と思いました。

しかし、私には「人生って、何なのだろう?」という苦しみがあったからこそ、師匠との出会いがあったと思うのですが、そこで、自分と同じように悩み苦しむ人々が集まる場所を作れないものだろうかと考えました。これが出発でした。振り返ってみると、その時私には何もなかった。その何もなかったことが良かったと思うのです。もしお寺があったらそれを守るだけで精一杯だったと思います。ないとお寺にそこそこ絵が描けるのであって、既に絵が描かれてあれば描けないわけです。そういうことで、私は何も無いということを受かったわけです。

もう一つ、私にはお金がなかった。もしお金があったらそれを元手にお寺を作ろうとしたと思います。ある方が、「何もないことは、いっぱいあることだぞ。」と言っていました。何もないからここに絵を描けるのであって、既に絵が描かれてあれば描けないわけです。そういうことで、私は何も無いということを受かったわけです。

まず、私には身を横たえる場所が必要でした。ないと考えが浮かびます。あれば考えないから浮かばない。四六時中寝る場所のことを考えていたある時、ふと、小学校の頃見た、ホームレスが土管の中で寝るという、ある漫画の場面のことを思い出しました。「どこにいても不安や恐れ、悲しみがあれば幸せではない。心の中が満たされていればどこにいても幸せだ」というお釈迦様の説話もあります。そ

こで私は町に出て、土管を寄附してもらえよう、そういう会社を一軒いっけん回りました。何軒目かで、ある社長さんが「どれでも好きなものを持っていけ。」と言ってくださったのです。しかし重くて持てないので、あきらめました。

その後、托鉢の最中に、お醬油屋さんの裏手に直径が2メートルもある木の大樽が置いてあるのを見つけ、それをお願いすることになりました。今度は樽をバラバラにして運びました。一人での作業は仕事が進みませんでしたが、時間はたっぷりありましたので、なんとか工夫しながら建てました。夜中に天井に渡してある萱が飛んでしまうと、お星様が見えました。雨漏りもします。今度は拾ってきた傘を天井にかけてみました。人間は、工夫が出来る。ないから工夫が出来るのに、私たちはないことを悔しいと思ってしまいがちです。でも、あることはあることで大変なことなんですよ。

こういうところで2年間生活しました。道元禅師は冬を寒いのではなく、「涼しかりけり」とおっしゃっていらっしゃいますが、ある時私が寝袋で寝ていますと、パチーンという音がしました。翌朝目覚めて見てみると、鶴首の花瓶が割れ、その周りに花びらが散っていました(水が凍って膨張して割れた)。「は〜、冷蔵庫より寒いんだな〜。」と思いました。30代で、若かったから出来たのかもしれませんが、でもこれは私に与えられた『時機』だったんですね。

その後、屋根はトタン屋根になり、屋根のトップには拾ってきた鍋を置きました。これはいまだに役目を果たしております。捨てるものは何もないのです。人も物も、大事なものはどう使うかです。

「報四恩」ということ

私が僧堂で覚えた言葉に「四恩」があります。父母の恩、社会の恩、郷里の恩、大自然の恩です。人間というものはこの四つの恩に守られていることを知り、自分もこの恩に報いなければならないと考えました。そしてこれを人々にも教えたい、これは宗教家が、お寺が教えるべきことだろうと考えました。そこで「報四恩精舎」という寺の名前を考えましたが、この名前が普通のお寺の名前と違って、それが一時問題となりました。また、私のところでは不登校や、非行少年などを預かっていたのに対し、それは宗教法人のすることではないと県の議会で問題になりました。それは福祉の分野であるから、福祉法人を作ってくれとい

うのです。ところが福祉法人になると坐禅や作務などが出来なくなるのでやめろという役員の反対に合いました。そこで今度は、では補助がないが何をしてでも自由な財団法人にしてくれという話があり、結局県の要望で財団法人喝破道場が出来たというわけです。

財団の仕事としては、若者自立塾・ヘアハウス「随流荘」・ハーブ喫茶「ゼルコバ」・四恩農場の運営があります。また、社会福祉法人四恩の里として、情緒障害児短期治療施設「若竹学園」・児童養護施設「亀山学園」の経営があります。この児童養護施設については県立の養護学校が財政難で民間に事業を委嘱することになり、手を挙げたのですが、選定のためにプレゼンを行う事になりました。私どもはお金もないし、プレゼンが何なのかも分かりませんでした。そこで船井総研の船井幸雄会長に相談したところ、力になっていただけることになりました。当日私どもの資料に船井総研の名があるのを見た方から、「和尚のところは船井総研に頼むほど実はお金があるんじゃないか!」と言われ、「いや、ないから船井さんに頼んだのです」と言ったら、びっくりされたといういきさつがあります。

さて、若者自立塾には「喝破五訓」というものがあります。

- 1、よろこんで与える人間となろう
- 2、いのちを大切に作る人間となろう
- 3、心静かに考える人間となろう
- 4、使命に生きる人間となろう
- 5、規律ある幸せ喜ぶ人間となろう

人は一人では生きていけません。私もそうです。いろいろな人がいろいろな形で応援してくださったから、今の私があります。醤油樽での生活から、いろいろな人の力を借りてここまでやって来れたのです。

道元禅師の教えという「教育法」

喝破道場は厚生労働省の委託事業として、不登校・引きこもり・ニートなどを預かり、生活訓練や労働体験により就労・就学へ導くための活動を行っています。やり方はすべて僧堂形式です。つまり朝、坐禅をしてお勤めをしてなど。本来ならば外国の新しい教育方法をもってするのがい

いという意見もありますが、私の意見は違います。日本には素晴らしい教育方法があるのです。アメリカで新しい心理学をやった臨床心理士などいますが、私の知る範囲では、ほとんど役に立ちません。なぜなら足元が動かないからです。お釈迦様は対機説法をなさいました。つまり、自らの足で45年間歩き、カウンセリングを行ってきたということです。私は、もっともっと仏教に根付いたカウンセリング・教えが広がらなければならないと思っています。僧堂生活と同じ生活で、それで人間は変わります。ということは、人間は環境に適応する力があるということです。逆に言えば、人間は今与えられたその環境に適応してしまうのです。3ヵ月で子どもたちは変わっていきます。子どもたちは、蛇口から流れる水ではなく洗面器に貯めた水で顔を洗っていますが、若竹学園の小学2年生の子どもたちでさえ、それが出来ています。つまり、洗面をするには蛇口をひねればいいと、私たちが教えてしまっているということです。そうじゃない。洗面器に一杯の水があれば顔が洗えるということを教えれば、子どもたちは洗えるんです。朝起きることが出来なかった子どもたちも、朝起きて坐禅ができるんです。日中ハーブ畑に入れば、「これは何だろう?」というような、いろいろな感動もあります。子どもたちは竹の子のように大きくなります。彼らはいろいろ吸収する力を持っているのです。

喝破道場を去った子どもから「17年間で初めて洗濯をしたこの1週間は自分のためになった」などのメールをもらいますが、それを見ると、本当に家庭の生活がそのまま子どもに出るのだと思います。誰が17年間洗濯をさせなかったのでしょうか。私は嫌というの「押し付け」(でいいの)だと思っています。嫌というから、かわいそうだからとさせない方がかわいそうです。嫌われたくないという思いが邪魔をしている。でも、我が子のために言う。あるいはどんな団体であっても、嫌われてもいいからやるという人間がいるところは成長します。こうして一人の女の子が確かに禅道場の中で変わっていつているのです。それは何か?

この禅というもの、特に私どもには道元禅師の750年以上も歴史のある教育法があるということ、これが私の言いたい事なのです。



特集 2008年度総会・講演会報告

2008年度総会議事録と報告

S Z I 事務局員 菅原 研 洲

SOTO禅インターナショナル（以下、SZIと略記）は、2008年度の総会を、2月20日（水）に曹洞宗檀信徒会館3階桜の間にて開催した。総会参加者は、30名であった。

【会長挨拶】

本来、福島伸悦会長が挨拶するところだったが、流行に敏感でインフルエンザにてお休み。代わって細川正善副会長から挨拶申し上げた。

本年度はSZI発足15周年の節目の年に当たって、スローガンの「人・情報・縁－運動から行動へ」を進めることと、以下に挙げる現執行部の目標が改めて確認された。

- 1：組織は、トップダウン型にするのではなく、多くの意見を集約できるものにしたい。
- 2：時代の要請によって柔軟にプロジェクトを立ち上げ、見直す。
- 3：自ら会の活動を見直し、迅速化と効率化を目指したい。

特に、今年は現在の社会状況を見ながら、寺院の活動の拡大を模索することを提唱したい。「エンゲイジド・ブディズム」という言葉もあるが、今回は世界各地にて社会との繋がりを重視してきた僧侶などを招き、講演していただく予定である。講演を聞くだけでなく、日本の宗門各寺院にて受容していただき、実践可能となるように情報を提供したい。それらの活動から各寺院が社会に根付き、信仰と癒しの場所となることを願ってやまない。

この特別計画には、曹洞宗宗務庁を始め、多くのご支援を賜ったことを御礼申し上げるとともに、さらにこれまで以上のご協力を願いたい。

【来賓挨拶】

宮下陽祐教化部長老師から、今年SZIが創立15周年を迎え



福島会長に代わり、
挨拶する細川副会長

ることへの祝意が述べられたあとで、その活動を、各総監部の活動を支援するだけではなく、自ら人材を発掘するなどして、曹洞宗の国際布教に貢献していただいていると顕彰していただいた。現在の曹洞宗の国際布教は、開教より100年が過ぎ、どの寺院も日系社会への布教と、

新たに曹洞禅を海外の方に敷衍するという二極化が行われていることが示された。現在、各総監部に所属する国際布教師・特別寺院は、たゆまぬ努力によって寺院組織の維持、並びにメンバーへの布教に邁進しているが、その努力は今後も力強く行われることを期待しているとされた。

国際布教全体に関わることだが、海外僧侶の位置づけが大きく変更された。昨年、欧州に宗立専門僧堂を開設し、初めての安居を終えることが出来た。今後は、認可僧堂に安居されない限り教師資格が取れないことを、現地の伝道師・伝道教師にご理解をいただいて、海外僧侶の皆さんが揃って教師資格を取っていただけることを願うものである。さらに、特別寺院関係の規程を整備するべく、各関係機関にて調整中である。以上の状況は、今の段階では移行期であり、運用もスムーズにしているわけではないかもしれないが、重ねて説明することで、海外の皆様にご理解をいただきたいと願っている。また、宗立専門僧堂は今年も9月からヨーロッパに開設する予定であり、教学部ではその次の段階を模索中との情報も開示された。

なお、現在SZIにて編集集中の『曹洞宗海外寺院ガイド』によって、各地に広がる曹洞禅の流れを感じ取っていただきたいし、また、今後もSZIの活動が積極的に展開されることを願ってやまない、とご挨拶いただいた。

【総会議事】

議長は、会場からの立候補がなかったため、事務局に選出を一任された。事務局では、群馬県長楽寺住職・峯



宮下教化部長老師より
お話をいただく



岸正典師を選出した。

「第1議案：2007年度事業報告、2007年度会計報告、国際布教支援金運用報告、会計監査報告」の議論が行われた。始めに事務局及び会計・担当副会長、そして監事から順次報告が行われた。なお、それぞれの報告書は本誌（8～9頁）に収録してあるので、ご参照願いたい。報告後、質疑応答は特になく、拍手でもって承認された。

「第2議案：新役員承認」の議論が行われた。新潟県のさとうのりさんを、新たな事務局員として承認していただくように事務局からの提案があり、承認された。新役員紹介は、本誌23頁の編集後記をご参照願いたい。

「第3議案：2008年度事業計画案、創立15周年記念事業企画案、2008年度予算案審議」の議論が行われた。始めに事務局及び会計・担当副会長から順次提案が行われた。それぞれの計画案・予算案は本誌（8～9頁）に収録してあるので、ご参照願いたい。提案後には質疑応答が行われた。会場からは特になかったが、議長の峯岸師から、特別募金に関する説明と、「国際布教支援積立金」の大幅な取り崩しについての説明が求められた。事務局からは、まず、シンポジウム開催のための支出が多いため、一口5000円の特別募金200口を、会報や直接的な呼びかけなどで賛同を求めたいと返答した。また、これまでもSZIでは数回、同様の募金を行ったことが説明された。また、大幅な取り崩しについては、ここ3年あまりの懸案事項であった『曹洞宗海外寺院ガイド』が発刊されるため、その費用として取り崩すことが説明された。しかし、支援積立金という性格からすれば、大幅な減少は望ましくないため、様々な方法で支援積立金が途切れないよう、これまで同様、慎重に積立・支援したいと返答した。

「第4議案：その他」の議論が行われた。事務局から、会場に来られた会員各位に対し、15周年記念事業への協力を依頼した。

【15周年記念講演会】

今年の総会講演会は、15周年記念と銘打って報四恩精舎住職・野田大燈老師から、「禅的発想のすすめ」と題してご講演いただいた。貴重な機会であるため、広く多くの方にお越しいただくことを発願し、会員各位の参加に合わ

せて、永平寺主催夏期大学講座「禅といま」に参加されている方々へお声掛けをした。合計150名を超える方々に参加していただき、揃って野田老師のお話を頂戴した。ご講演の詳細は本誌4～5頁をご参照願いたい。

【懇親会】

檀信徒会館6階にあるレストラン・パンセに会場を移して、懇親会が行われた。この機会は会員相互の親睦を図ることを目的に行われている。元々当会は、国際布教師（海外開教師）のOB会として発足したが、この機会にOBの皆様においても親睦を図っていただいているとのことである。今回は、司会に事務局の太田と菅原が、それぞれボケとツッコミ役になり、掛け合っの司会を行った。

懇親会の途中には、横山泰賢師から、昨年ヨーロッパ国際総監部に送られた応量器について感謝の意が表され、届いたその日から有効に使用されたことが報告された。

SZIの懇親会は、毎年ゲストに演奏などをしていただくが、今年は「津軽三味線小山会」から、総師範の小山貢憲先生、小山憲心先生（静岡県慶昌院住職・磯田浩一師）のお二人に来ていただき、迫力ある演奏をしていただいた。先生方は、横浜市や静岡県富士市などを拠点にしながら、これまでも舞台・テレビ・学校教材ビデオなどに出演しておられるが、日中友好の中国演奏ツアーや、アテネ五輪開催時の演奏会にも参加しておられる。今日は、そのように世界で高い評価を受けた演奏を、懇親会参加者一同で拝聴した。



懇親会で津軽三味線の妙に酔う

SOTO禅インターナショナル2007年度収支決算報告書

総収入金 7,194,800 円
 総支出金 5,281,172 円
 差引残高 1,913,628 円

収入の部				
項 目	本年度予算	本年度決算	増 減	備 考
会費収入	2,800,000	3,215,000	415,000	年会費
事業収入	300,000	160,000	△ 140,000	雑会費等
助成金	1,200,000	2,200,000	1,000,000	西大本山、宗務庁
雑収入	400,000	172,410	△ 227,590	向子、基梁
支援構立金取崩	0	0	0	
繰越金	1,447,390	1,447,390	0	前年度繰越金
計	6,147,390	7,194,800	1,047,410	

支出の部				
項 目	本年度予算	本年度決算	増 減	備 考
国際布教支援事業費	500,000	500,000	0	国際布教支援構立金
事業費	3,000,000	2,260,626	△ 739,374	雑会費、ゆめ館、海外研修等
印刷費	200,000	102,344	△ 97,656	各種印刷費
会報費	1,300,000	1,507,053	207,053	会報印刷、発送費、会報担当費、印刷料
会議費	500,000	644,757	144,757	各会議費、会報交通費支弁
事務費	300,000	145,802	△ 154,198	事務連絡費、消耗品費、旅送手続料
通信費	200,000	99,740	△ 100,260	会報以外（総会報告等）の郵送費等
備品費	30,000	5,100	△ 24,900	
渉外費	40,000	15,750	△ 24,250	電報、郵便等
予備費	77,390	0	△ 77,390	
計	6,147,390	5,281,172	△ 866,218	

◎国際布教支援構立金	(定期貯金・前年度迄)	10,128,775 円
	(本年度構立)	500,000 円
	(本年度国際布教支援金)	620,750 円
	(本年度取崩)	0 円
	(本年度累計額・定期貯金)	10,008,025 円

上記の通り報告書を提出いたします
 SOTO禅インターナショナル会計 田宮 隆児

監査の結果、上記の通り相違ありません
 SOTO禅インターナショナル監事 加藤 孝正 黒柳 博仁

2008年2月1日

2008年2月1日

印

印

SOTO禅インターナショナル2008年度収支予算書

総収入金 7,813,628 円
 総支出金 7,813,628 円
 差引残高 0 円

収入の部				
項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
会費収入	2,800,000	3,000,000	200,000	年会費
事業収入	300,000	300,000	0	雑会費等
助成金	1,200,000	1,200,000	0	西大本山、宗務庁
雑収入	400,000	400,000	0	向子、基梁
支援構立金取崩	0	1,000,000	1,000,000	
繰越金	1,447,390	1,913,628	466,238	前年度繰越金
計	6,147,390	7,813,628	1,666,238	

支出の部				
項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
国際布教支援事業費	500,000	400,000	△ 100,000	国際布教支援構立金
特別会計繰入金	0	2,900,000	△ 1,000,000	15歳年配選挙事務別会計へ 印刷費、旅送費、海外研修料、印刷・複製費 等(諸金金は特別会計へ)
事業費	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000	0 各種印刷費
印刷費	200,000	200,000	0	0 会報印刷、発送費、会報担当費、印刷料
会報費	1,300,000	1,300,000	0	0 各会議費、会報交通費支弁
会議費	500,000	500,000	0	0 事務連絡費、消耗品費、旅送手続料
事務費	300,000	250,000	△ 50,000	0 会報以外（総会報告等）の郵送費等
通信費	200,000	200,000	0	0
備品費	30,000	30,000	0	0
渉外費	40,000	30,000	△ 10,000	0 電報、郵便等
予備費	77,390	3,628	△ 73,762	
計	6,147,390	7,813,628	△ 1,233,762	

◎国際布教支援構立金	(定期貯金・前年度迄)	10,008,025 円
	(本年度構立)	400,000 円
	(本年度国際布教支援金)	500,000 円
	(本年度取崩)	1,000,000 円
	(本年度累計額・定期貯金)	8,908,025 円

*海外布教支援構立金運用資金細目に基づき取り崩す可能性がります

上記の通り予算書を提出いたします

SOTO禅インターナショナル

会計

田宮 隆児

2008年2月20日



2007年度SZI事業報告 (2007年1月1日～12月31日)

- ★ **自己研鑽事業**
『中央評論・No.261 特集 宗教研究の現在』 講読
宗教間対話研究所月例会参加
各種講演会・勉強会参加
役員各自ブログ開設・運営
- ★ **布教・協力支援事業**
☆ **総会／講演会 主催**
 - ・2月14日(水) 曹洞宗檀信徒会館(3F 蘭の間)
「ヨーロッパでの活動報告と理念」／曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監 今村源宗老師
- ☆ **両大本山ワークショップ 主催**
 - ・総持寺ワークショップ 5月7日(月) 開催 大本山總持寺
 - ・永平寺ワークショップ 5月8日(火) 開催 大本山永平寺
- ☆ **「如是願行」私が歩んだ北米開教の道／米国仏教団浄土真宗開教総長 小杭好臣開教使**
- ☆ **熊本聖護寺国際安居通訳派遣**
 - ・7月1日～9日 熊本県・聖護寺にて
- ☆ **各種行事人材派遣／交流**
 - ・永平寺主催夏期大学講座運営協力 7月27・28日 檀信徒会館にて
- ☆ **第9回ゆめ観音アジアフェスティバル 主催**
 - ・9月8日(土) 大船観音にて
- ☆ **シルクロード音楽の旅 支援協力**
 - ・8月25日(土) 橋チャリティーコンサートホールにて
- ☆ **財団法人全日本仏教会神奈川大会 支援協力**
 - ・11月19日・20日 パシフィコ横浜にて
- ☆ **国際布教支援金支給**
 - 4件 ①神奈川・最乗寺・禅心師 ②兵庫・安泰寺
 - ③北米・龍門寺 ④ヨーロッパ総監部(応量器)
- ☆ **海外寺院へ仏具・法具を送る**
北アメリカ・南アメリカ・ヨーロッパ各総監部宛(法具法衣など)
- ★ **海外・交流事業**
☆ **ヨーロッパ布教40周年記念行事 支援・協力**
 - ・6月8日～10日 欧州各地にて
- ☆ **北米ハワイ檀信徒大会参加**
 - ・10月21日・22日 ラスベガスにて
- ★ **出版事業**
SZI会報34号(4/25)、35号(8/5)、36号(12/20)
海外寺院ガイドブックレビュー版発行(12/25)
- ★ **広報事業**
SZIホームページの運営・海外寺院ガイドブックWeb版の運営
ブログやEメールなどによる各事業の広報活動・情報提供

以上

2008年度SZI事業計画 活動テーマ＜人・情報・縁＞運動から行動へ→(2008年1月1日～12月31日)

- ★ **自己研鑽事業**
宗教間対話研究所月例会参加
各種講演会・勉強会参加
役員各自ブログ開設・運営
- ★ **創立15周年記念事業**
☆ **総会／講演会 主催**
 - ・2月20日(水) 曹洞宗檀信徒会館(3F 校の間)
 - ・講演会「禅的発想のすめ」／(財)喝破道場理事長・報四恩精舎住職 野田大陸老師
- ☆ **両大本山ワークショップ 主催**
 - ・總持寺ワークショップ 6月16日(月) 開催 大本山總持寺
 - ・永平寺ワークショップ 6月20日(金) 開催 大本山永平寺
- 講師 ダンカン・隆賢・ウイリアムス先生
- ☆ **創立15周年記念シンポジウム 主催**
 - ・6月19日(木) 開催 檀信徒会館(3F 校の間)
- 基調講演 奈良康明先生 / コーディネーター ダンカン・隆賢・ウイリアムス先生
- ★ **布教・協力支援事業**
☆ **第10回ゆめ観音アジアフェスティバル 主催**
 - ・5月19日(月)・6月22日(日) キャンドルナイト 大船観音寺にて
 - ・9月6日(土) 第10回ゆめ観音 大船観音寺にて
- ☆ **熊本聖護寺国際安居通訳派遣**
 - ・7月初旬 熊本県・聖護寺にて
- ☆ **各種行事人材派遣／交流**
 - ・永平寺主催夏期大学講座運営協力 7月22日(火)・23日(水) 檀信徒会館にて
 - ・永平寺三世徹通義介禅師700回御遠忌文化講演会 6月15日(日) 駒澤大学大講堂
 - ・WFB世界仏教徒会議日本大会 11月14日(金)～17日(月) 浅草ビューホテルにて
- ☆ **塔婆で植林プロジェクト**
- ☆ **海外寺院への仏具・法具を送る**
- ★ **出版事業**
SZI会報37号、38号、39号
海外寺院ガイドブック発行(4月)
リーフレットの作成
- ★ **広報事業**
SZIホームページの運営・海外寺院ガイドブックWeb版の運営
ブログやEメールなどによる各事業の広報活動・情報提供
- ★ **国際布教支援金の運用**
 - ・希望者の募集、対象者の選定、その他

… 海外レポート① …

Sanshin Zen Community: 三心寺

北アメリカ国際布教師 おく むら しょう はく
奥村正博

駒澤大学在学中の1969年、当時京都市にあった安泰寺の摂心に初めて参加した時、大勢の外国人が坐っているのを見て強い印象を受けました。その後、1970年に安泰寺住職であった内山興正老師について得度を受け、1975年老師の引退まで安泰寺で修行をさせていただきました。毎月の5日間摂心の参禅者が50人ないし60人でしたが、その3分の1は外国人でした。駒澤大学を卒業して安泰寺に安居する時に老師から、「これからは英語で仏法を説き坐禅の指導ができる人が是非とも必要なだから、英語を勉強するように」と言われました。坐禅修行の最初から、外国の人達と共に修行することは私にとってとても自然なことになりました。

1975年から1981年まで5年間、アメリカのマサチューセッツ州バレー禅堂（※1）で修行させていただきました。身体の故障のために帰国いたしましたが、その時に内山老師から、坐禅のテキストを英語に翻訳する仕事をするようにとの指示を受け、1992年まで、日本において主に海外から日本に来た人達を対象に坐禅と翻訳の活動を続けました。

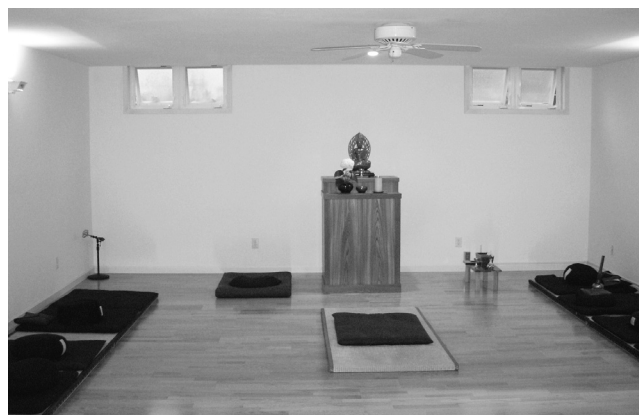
1993年再度渡米し、ミネソタ州ミネアポリス市にあるミネソタ禅メデティション・センター：願生寺（※2）に開教師として赴任いたしました。3年間の任期が終わった時、日本で行っていたような活動が出来る道場をつくりたいと願って、三心禅コミュニティを創立いたしました。「三心」というのは勿論、道元禪師が『典座教訓』で説かれている、喜心・老心・大心です。内山

老師はこの三心をもっとも大切な修行者の心構えだと教えておられました。

2000年から、インディアナ州のブルーミングトンという町に、三心禅コミュニティの道場を作ろうという計画が具体化し、2001年3月に現在地に用地を購入いたしました。1エーカー足らずの、建物が何もない空き地でした。2002年4月に地鎮式を行い、同年の秋から工事に着手しました。

2003年6月、家族と共にブルーミングトンに移転いたしました。お寺となる建物はまだ居住可能な段階に達しておらず、新築の建物に入居出来るようになったのは8月の半ばになってからでした。最初は2階の私の仕事場になる予定の部屋で坐禅を始めました。地下室の坐禅堂が使用可能になったのは8月末になってからでした。結局、建物がほぼ完成して、市当局からの監査を受けるに至ったのは、ほぼ1年後のことでした。それまでは、工事現場に無理やり住み着いていたというのが実情でした。

それでも、2003年9月のはじめから、5日間のリトリート（泊り込みの研修会）を開始しました。それから現在に至るまで4年半が経過しております。お蔭様で、少人数ではありますが地道に活動を続けて来ることが出来ました。この間に、数人がアメリカの各地から三心寺（※3）で修行するために移転して来ました。私から得度を受けた人は12人います。その多くは職業や家族など諸般の事情で遠隔地に住んでいますが、現在私を含めた4人の出家者がブルーミングトンに居ます。三





事を続けています。
また私の講義の文字起こしをしてくれている人達が数人おり、それを元に本を作るプロジェクトも何人かの人々の手で進んでいます。内山老師は、坐禅修行者

心寺にはまだ居住できる施設がありませんので、それぞれ近くにアパートを借りて、毎日坐禅に通っています。

2005年2月には、海外寺院として認可されました。これにより、毎年首座を置いた夏安居を行うことが出来るようになり、これまで3人が首座法戦式を行いました。

発足して間もない道場ですので、まだまだ難問を抱えておりますが今後とも、坐禅修行と道元禅師の教えの参究に努力をしてみたいです。

三心禅コミュニティ：三心寺では以下のような活動を行っております。

- 1) 週6日、土曜日以外、朝5時から7時まで2柱の坐禅。朝課。火曜、木曜、日曜には朝食を一緒にとります。火曜、水曜、木曜には6時から夕方の坐禅があります。
- 2) 日曜日午前中、日曜参禅会。暁天坐禅、朝課、朝食の後、9時から坐禅。10時から法話。11時から茶話会、デスクッション。
- 3) 毎週水曜日、夕方7時から8時半まで勉強会。現在は『典座教訓』をテキストに講義。
- 4) 毎年4月初旬から7月初旬まで3ヵ月間の夏安居。
- 5) 年に10回の5日間の接心、リトリート、眼蔵会。京都にあった安泰寺と同じ差定の坐禅だけに専注する摂心を年に5回。講義や作務を交えたリトリートが年に2回。『正法眼蔵』の講義を一日に2回行う眼蔵会を2回。禅戒を学び、在家得度式を行う7月の禅戒会。
- 6) 継続的な道元禅師の教えの参究。『正法眼蔵』、『永平広録』、『永平清規』、『学道用心集』、『随聞記』その他、宗乗の理解に必要な仏教や禅一般についての勉強を、リトリート中の講義や、眼蔵会、日曜参禅会、水曜日の勉強会、夏安居などを通じて行っております。
- 7) 眼蔵会で使う講本は、可能な限り、私自身の翻訳を使うようにしております。そのために翻訳の仕

の育成と、テキストの作成を生涯の誓願とされていましたが、その誓願をアメリカの人々とともに受け継いで、ささやかながらも努力を続けたいと願っております。

- 8) 毎年、数ヵ所の禅センターを訪問して、眼蔵会、摂心、ウォーキング・リトリートなどを行っています。

将来、敷地内に恒久的な本堂兼坐禅堂、及び宿泊施設を建築したいと願っています。それらの施設が完成すれば、もっと多くの人々に坐禅修行と、宗乗の参学の場所と機会を提供することが可能です。インディアナ州の州都、インディアナポリス周辺には日系の会社も多くあり、国際空港もあります。ブルーミントンからインディアナポリスから自動車です約1時間の距離にあり、インディアナ大学が大きな比重を占める、静かな大学の町です。

どうぞ御理解と御支援の程御願い申し上げます。

『曹洞宗海外寺院ガイド』の各ページにある寺院紹介を併せてご覧ください。

- (※1) バレー禅堂 24ページ
- (※2) 願生寺 22ページ
- (※3) 三心寺 43ページ



… 海外レポート② …

ダイフクジ・ソートー・ミッション コーヒーの花とともに、この地で開花した法の華

米国ハワイ州ハワイ島・コナ大福寺法務担当 なか で じ こう 中 出 慈 光

毎週金曜日の午前中はお寺のお掃除の日。いつものメンバーが現れる前の午前7時、既にお寺に到着しているのが日系2世で88歳のミエコ・ミヨセ、85歳で弟のチリオ、そして同じく85歳のヨシコ・イケダだ。ミエコは香炉の灰作務にとりかかり、チリオは掃除機をかけ、ヨシコは長椅子や窓の棧を無心に拭いてまわる。その後1時間くらいの間に、明るい「グッ、モーニング!」の声と共に一人また一人と到着し、最終的には15名くらいの人がそれぞれ本堂、観音堂、納骨堂、そして外回りの持ち場へと向かう。作務メンバーの顔ぶれは若いチベット僧、癌と向き合う白人女性、日系のコーヒー農家、禅の修行に打ち込む女性、ゴルフ場の職員と多彩だが皆仲良く働く。「コーヒーブレイクの時間だよ!」とバーナード・モチヅキの大きな声が響くと、それぞれが手に持っていた雑巾や箒などを降ろしソーシャルホールへと向かい、コーヒーやおやつを味わいながら楽しい話題で盛り上がる。作務メンバーは大福寺に集う15あるグループのうちの一つで、まさしくハワイ語でいう「オハナ」、そう家族のようなものだ。

オハナのようなグループが大福寺には他にもある。お寺の坐禅会は毎週水曜日の朝6時より始まるが、72歳になるジャン・ボバードは20年以上、この会に姿を見せなかったことがほとんどないくらいだ。現在ジャンはお寺の理事長を務め、設備の管理から諸行事の運営に至る責任を人目のつかないところでこなしている。陶芸家で農家でもある彼女は仏道への帰依が深く、仏教を日々の生活に取り入れることを常に人々

に勧めている。

6歳になるマコは4歳年下の弟コウタロウと赤ちゃんの時からお母さんに連れられてお寺へ来るようになった。本堂に足を踏み入ると合掌し、それからお香を供え観音堂へ向かうのは、お母さんと日曜の朝9時半から始まるファミリー・サービスに参加するためだ。マコは歌うこと、そして踊ることが大好きで、大きな声で十句観音経や般若心経をお唱えする。お堂一杯に坐っている大勢の子どもたちや大人の中で、マコは時折ぐずる弟の面倒を見てはお母さんの手助けをする。

大福寺梅花講の良きリーダーはフジコ・アカマツだ。89歳になる彼女は月に2度の稽古には今でも自ら車を運転してお寺にやって来る。幼少の頃より大福寺に出入りしていたためか、背筋をスッと伸ばした姿勢、そして穏やかな視線からも、彼女の信仰が深く純粹であることが窺える。近頃高齢のためか時々声が震えるものの、力強いその歌声には威厳を備えた落ち着きを感じられる。

大福寺の日常のほんの一部に触れたが、このお寺はダイフクジ・ソートー・ミッションとして1914年、小玉介石師によって太平洋を見下ろすハワイ島、コナの傾斜地に建てられた(※『曹洞宗海外寺院ガイド』10ページ参照)。お寺が建って94年、世の中は大きく変動したものの、この地に降り注ぐ甘露の法雨はコーヒーの木の白い花のようにほのかな甘い香りを風にのせ、今日も静かに降り注いでいる。

(訳: S Z I事務局 田宮隆児)



①大福寺に集う作務のメンバー。彼等は「オハナ」、つまり家族のようなものである ②赤ちゃんの時からお寺に通ってきているマコ(右) ③前列一番左が慈光師 ④左からお手伝いのチベット僧ラブジェー師、ミエちゃんことミエコ・ミヨセと弟のチリオ ⑤これからソーシャルホールで楽しいひと時 ⑥梅花講の良きリーダー、フジコ・アカマツ ⑦コナ大福寺 ⑧朝から作務にやってくるヨシコ・イケダ

… 海外レポート③ …

ロサンゼルス禅宗寺 茶筌供養

S Z I 事務局員 ほそ かわ ひろ よ
細 川 浩 代

昨年11月4日(日)にロサンゼルス禅宗寺(※『曹洞宗海外寺院ガイド』13ページ参照)で行われた茶筌供養のお手伝いに行ってきました。山下顕光先生が北米総監を務めておられた頃、私もアメリカに留学して大変お世話になり、その御縁で、今でも行くようにしています。この法要は、1975年から始まった禅宗寺の茶道教室で使用し、壊れてしまった茶筌を供養するために、1977年から始まりました。

私はいつも婦人会の皆さんのお手伝いをしていますが、この法要に参加する150人分の食事の準備が主な仕事になります。今の日本であれば、ケータリングを使う場合が多いでしょうけれども、ロサンゼルスで日本食の弁当を用意してくれる店があるわけではなく、あっても味や値段が気に入らないというジレンマがあって、これまでは全て山内で用意してきました。その下準備で、婦人会は1週間前から大わらわです。法要を成功させるためにと、皆さん裏方に徹して協力していますが、とにかく分量が多くて、かなりの手間になります。

2日前くらいからは、ひたすら野菜の仕込みがありまして、カボチャ・ニンジン・シメジ・ギンナン・甘栗などを朝から晩まで包丁で刻みます。それに、ワサビを効かせてヘルシーだと評判になる胡麻豆腐の仕込みも大変です。胡麻のペーストを、焦がさないように煮なくてはなりませんが、担当者は鍋から離れることもなく、ヘラを使って鍋の中身を八の字にかき混ぜ続けていました。その努力が実った胡麻豆腐は、多少お値段高めめの1つ10ドルでも、いつも人気の一品です。

日本の修行道場では、野菜かすなどを捨てずに、丁寧に料理して食材にするそうですが、その精神はアメリカにある禅宗寺でも受け継がれていて、3日間、私たちは、



余った野菜で作ったまかない料理を食べていました。私は毎年、禅宗寺での交流が楽しみです。一番の楽しみは、料理の仕込みそっちのけで交わされる他愛もない会話です。特に盛り上がるのは、やっぱりゴシップネタでしょうか。

私たちは、当日も含めて数日間料理にかかりっきりになってしまうので、茶筌供養を見たことがありません。ただ、包丁供養や針供養と同じように、命を持たない道具を大切に使い、使えなくなれば感謝の心を捧げることを多くの人びとに教えることで、日本人が培ってきた文化や精神を余すところなく伝えられる法要です。今後も、続けられることを切に願ってやみません。

しかし、そう願う反面で心配なこともあります。まずは、これまでお寺を支えてきたメンバーが徐々に減っていて、そしてお寺の周辺に住む住民のあり方が変わってきています。メンバー減少の問題は、参拝者が減るだけではなく、法要の準備をする婦人会が減ることも意味しています。これまでは、従来の方法を踏襲して日本料理などを出していましたが、このまま維持されるかは不透明です。お寺の周辺では、華人を始めアジアの人たちが増えており、大きな変化が見られます。その変化にお寺が対応し、今後その人びとが足を運ぶのかは不透明です。

ここ数年、以上のような不透明感は漠然と感じただけでしたが、今年は強くそれを感じ、一抹の不安も覚えました。各地の国際布教のあり方が変わって来ている昨今、国際布教の歴史では比較的早い時期に北米に根付いた禅宗寺でも、その曲がり角に来ているのでしょうか。だからこそ、この茶筌供養が大切だと思います。



… 海外レポート④ …

中国・ハルピン「侵華日軍第七三一部隊遺趾」訪問記

S Z I 事務局員 おお た けん こう
太 田 賢 孝

小学生の頃、生まれ育った家の近所に大きな廃墟がありました。そこは管理人の姿もなく、友達と探険をしたり、春先に蛙の卵を採ったりする格好の遊び場でした。「あそこには陸軍の軍医学校があった。入っちゃダメだ」と大人から言われても、遊び優先の自分たちが意に介すことは全くありませんでした。

それから四半世紀を経て、港区愛宕・青松寺さま主催の勉強会で大日本帝国陸軍731部隊（関東軍防疫給水部）の元少年隊篠塚良雄氏のお話を聞くという縁に恵まれ、かつて遊んでいた廃墟が731部隊の司令塔だったということも知りました。そしてこの勉強会を端緒として、何名かの宗侶が篠塚氏ら戦争問題を考える会に同行し、中国を慰霊訪問することになりました。主な目的地は中国黒竜江省の省都ハルピン。第二次世界大戦中に中国本土に進出した731部隊が置かれ、国際的に禁止されていた細菌戦に備え、生きている人を解剖する生体実験・細菌兵器の製造を行っていたそうなのです。

既に現地気温は氷点下という平成19年11月、ハルピンの平房に731部隊の跡地「侵華日軍第七三一部隊遺趾」を訪ねました。この遺趾の中央に「731部隊罪証陳列館」が建てられ、細菌兵器を作る器具・生体実験の再現模型などが展示されており、戦争時に秘密裏に行われた生体実験・細菌戦のありさまを今日に伝えています。ただ、部隊施設のほとんどが証拠隠しのため終戦直前に爆破されたそうで、遺趾のほとんどが草むらに覆われています。今では凄惨な行為を象徴的に伝える煙突など一部施設が残るのみです。



生体実験後の遺骸を焼いた
焼却炉の煙突

私たち一行は罪証陳列館の館長らと面会し、今日まで篠塚氏に去来した想いや平和を願う心情を述べ、そして今までの慰霊訪問とは異なり、今回初めて9名の僧侶が帯同していることが伝えられました。館長は穏やかな表情で、戦争中の命令とはいえ凄惨な罪を犯してしまったことを真摯に受け止め、そし



実験棟跡地で行われた慰霊法要

て懺悔に生きている篠塚氏に敬意を表し、人類全体の平和を実現するために、731部隊の罪業を伝えるこの施設を人類共通の財産としていきたいとのお話がありました。過去と現在、戦争と平和、中国と日本という様々な価値観、立場、習慣などが一つの場を共有した会談。両者の握手を経て、罪証陳列館の方たちは通常の執務に戻りました。

一方の私たちは、遺趾敷地内を散策することになりました。ただ、事前協議の中で先方から「敷地内で法要を行う許可が求められたら断らねばならない。それにもかかわらず法要を強行した場合、宗教者は身柄が拘束され、陳列館職員も処分される可能性がある」との話があったため、名目上設けられた「散策」でした。私たちは「散策」のため日本から持参した法衣に着替え、部隊が生体実験を行っていた実験棟の跡地に向かいました。跡地は罪証陳列館の裏手にあり、大きな窪地になっていました。ほとんどの建物が爆破され埋められたそうですが、実験棟だけは当時の様子を伝えるために土が掘り除けられたためです。

その窪地の前に、なぜか祭壇にもってこいの机が置かれていました。「立場」を離れた平和を希求する者として、私たちは背中を押していただいているのだと確信しました。「散策」の時間は僅かしかありませんでしたが、人類が犯し続けてきた戦争によって亡くなった方、全ての戦争被害者の方が永遠に安らかに眠られるよう、実験棟跡地に向かって精一杯の読経供養をお勤めさせていただきました。

今まで、戦争はしてはいけないという理想を頭で描いていました。けれど、今回の慰霊訪問の旅で、戦争をするとはどういう事なのか知ることが出来ました。戦争が起きたら、平和な時に描いている理想なんて全部吹き飛んでしまいます。戦争はしてはいけない、そのことを身に染みて感じる旅となりました。

… 国内レポート① …

ビルマ僧侶座談会 「希望を捨てず！」

曹洞宗総合研究センター研究員 まる やま こう がい 丸 山 劫 外

昨年の12月15日。サーサナーモーリ（仏教最高長老会議）国際ビルマ仏教僧協会の会長で、高僧として知られている、マレーシア在住のウー・パンニャワンサ長老の一行（アメリカ在住のスジャナワンサ師、長老の随行僧、民主化運動のチョウティンさん）と、福島SZI会長、亀野事務局長、内山温子、さとうのり、丸山の5人で東京駅近くの貸会議室で座談会の機会を得た。

ビルマでは、1962年のネーウウィン将軍のクーデター以来、40年以上にわたって軍事独裁政治が続いている。軍人や一部の人々だけが、贅沢な生活を享受しているが、多くの国民は貧困にあえいでいるのが、ビルマの状況である。

昨年ビルマ各地で、多くの僧侶が抗議行動を行った。それは、物価の高騰によってますます生活が困窮していく人々のために、国民生活の改善と物価の引き下げ、また不当逮捕されている人々の解放などを願って行われたデモであった。デモといっても、それは履鉢行為であり、唯一僧侶に許されている抗議行動である。決して軍事政権打倒が目的のデモではない。9月27日にヤンゴンで行われたデモは、ついに10万人規模に膨れあがった。その勢いを怖れた軍政は、暴力的に国家を破壊しようとしているとして、デモの鎮圧に実力行使に出て、僧侶たちに銃を向けたのである

ウー・パンニャワンサ長老の報告によれば、その後、ヤンゴンやマンダレー各地の僧院は、治安部隊や軍の襲撃を受け、残虐きわまりない仕打ちが僧侶にもなされていること。多くの僧侶は拘束され、お袈裟を剥がされて、屈辱的な虐待と拷問を受け、撲殺された僧侶もいること。一人も僧侶がいなくなってしまう僧院もあるということ。この度の弾圧で殺害された人数は、公式発表のような少ない人数ではなく、多くの僧侶や人々が殺害されていること。またいまだ拘束され、拷問を受けている人数もかなり多数であること。さらに孤児院の運営など慈善活動をしている僧侶の活動さ

えも厳しく制限されてしまっている現状であることなどが報告された。

長老たちは、基本的に政治問題に介入するつもりはないが、ビルマから仏教を滅ぼしてはならないということ、そして人々にとって自由で平和な生活が得られるようになることが願いであることを切々と訴えられた。そして今の悲惨な現状を世界の人々に知っていただき、支援をしてほしいことを願われた。また曹洞宗からも抗議文が出されていることに御礼を述べられた。ウー・パンニャワンサ長老はご高齢でもあり、足にも痛みがあるようだが、「NEVER TIRED」と言われて、北風の吹く寒いビル街を歩いて、次の集会場に向かわれた。そのお姿に掌を合わさずにはいられなかった。

ビルマの現状をみるに、タン・シュエという軍政のトップが交代したとしても、権力と利権を、軍政が手放すことは簡単には望めないだろう。民政移管ということを言っているが、それは軍政の隠れ蓑に過ぎないことを見抜かなければならない。

村や町を破壊し、包囲し、圧制者として一般に知られる人々を賤しい人であると知れ。（中村元訳『ブッダのことば』）

利権を手にした近隣の諸大国が、軍政を援助していることも問題である。また多民族国家という課題もあろう。しかし、決して希望を失ってはならない。ねばり強く、決して諦めることなく、ビルマの全ての民族に自由と平和が訪れ、楽しい笑い声で満ち溢れる日が来ますように！

ビルマから、真実の仏教の灯が消されませんように！

私たちにもなにかできるサポート（状況を理解し応援することや寄附など）を続けていこうではありませんか。

（亀野師のブログもご覧ください。

<http://kamenobne.jp/blog/archives/001013.html>）



ウー・パンニャワンサ長老からビルマ国内僧侶の過酷な現状が説明される



前列左から福島会長、ウー・パンニャワンサ長老、スジャナワンサ師、随行僧 後列左から亀野、内山、丸山

全日本仏教徒会議神奈川大会報告

S Z I 事務局長 ^{かめ の てつ や} 亀 野 哲 也

平成19年11月19・20日の2日間、第40回全日本仏教徒会議神奈川大会が「地域の縁 アジアの縁-共生をめざして」という大会テーマにより横浜・みなとみらいのパシフィコ横浜を会場に開かれました。この大会は財団法人全日本仏教会が財団創立50周年を迎え、全日本仏教会と神奈川県仏教会が主催となり開催されたもので、SZIの協力事業でもあります。

大会日程1日目(19日)には開会式、駒澤大学名誉教授・駒澤大学前総長・奈良康明先生による基調講演、4分科会討議と加盟団体代表者会議・交流懇親会が行われました。

奈良先生は講演において、仏教の社会観について「個と全体の関係は、単なる個の集合体が全体を構成するのではなく、個々の関わり合いを含めた総体が全体であるという縁起の社会観とも言うことができ、その中で重要なことは慈悲であり共感、共生である。その実践が草の根的対話である」と説かれました。

引き続き行われた4分科会討議は、第1分科会「アジアの平和と仏教徒の役割」～日本仏教青年の可能性を求めて～、第2分科会「少子高齢化社会と寺院のあり方」、第3分科会「現代社会における仏教葬儀のあり方」～本来の機能を失いつつある現代の仏教葬儀～、第4分科会「生命倫理と仏教徒に問われること」～人の一生が始まる瞬間と死ぬ瞬間はどの時点だろうか～、という現代の仏教において重要な各分野の課題について座長・提言者・パネリストを中心に討議が行われました。

第1分科会は、ダライ・ラマ14世法王との対談をされたことのある上田紀行氏を座長とし、2日目の特別記念講演の内容に繋がる分科会討議でありました。その中で、パネリストの「日本の僧侶は、学問は出来るのに自信が無いように見える。それは本当の意味で仏教が身に付いてい

ないからではないか」という発言が印象的でした。第4分科会においても、提言者は「僧侶が寺に閉じこもって職務怠慢をしていること」への批判をされ、「宗教者は積極的に社会に参加していくべき」と主張されています。どの分科会も仏教に関わるものとしての実践について示唆を与えていただけるものでした。

2日目(20日)は記念式典及び法要、ダライ・ラマ14世法王による特別記念講演という構成で行われました。会場周囲は厳戒態勢でしたが、そのような緊張感とは裏腹に、講演会場内は法王の醸し出す柔らかく心地良い雰囲気包まれました。日本語への通訳がされている間、会場内の一人ひとりに合掌したり、手を振ったり、笑顔で微笑みかけたりと、実に気さくです。しかしながら講演は時間をかなり超過するほどの熱演で、私たちが時々はっとさせるほどの気迫が感じられました。

講演の内容を一言で表わすならば、「慈悲の心に根ざした実践をせよ」ということであり、前日の分科会と通じるものでした。以下、講演録を紹介させていただきます。

ダライ・ラマ14世法王講演録
演題 「信ずる心と平和」

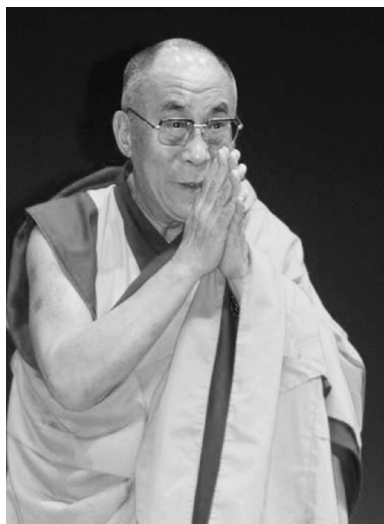
現代、私たちは戦争や流血事件、テロなどが必ずどこかで起こる、あまり健康的でない時代を過ごしている。また、若い人を中心に精神的危機、こころの問題が広がっており、地球規模で環境問題、貧富の差が拡大しつつある。60億の人々が暗闇に突進する状況は人間の持つ考えや姿勢が引き起こしていると言える。

しかし、未来は必ずしも暗闇に向かうとは言えず、明るい兆しもある。

日本は第二次世界大戦、特に広島、長崎の原爆で完璧に町が破壊されてしまったにもかかわらず、望みを捨てずに立ち上がり、復興へ心をつにして働いてきた。それが日本の繁栄の原動力となっている。

20世紀を振り返ると世紀の前半は、戦争が問題解決の手段であり、市民たちが国のために喜んで戦争に参加した時代であった。環境問題に関してはその責任を負っていることを知りえなかった。こころの問題については近代科学と精神の分野には深い関連性はないという捉え方を





していた。政治的・社会構造については全体主義的なものの考え方が平和や幸せをもたらすと考えていた。人権については人間の尊厳に対して論議される時代ではなかった。

しかし、20世紀後半になると、世界中に蔓延する暴力や流血に嫌気がさ

し、それではいけないと平和や非暴力の考えを持つ人が増加した。環境への認識も高まった。こころの問題も身体の健全と精神の健全は親密な関係にあり、こころや感情について学ぶことが大切だと気が始めた。そして人権は世界の多くの国で尊重されるようになった。

このように20世紀の間だけを見ても大きな変化があった。痛みの経験は我々の人間性を成熟させ高める。過去の間違いや、無関心、無知を改善することにより21世紀はより幸せな時代となり、開かれていくだろう。

過去の間違い、無知の分析を行うことにより、私たちはいかに物質的価値に振りまわされ、内面的価値観に十分な注意を払ってこなかったか、自と他に明確な線引きをして、それによりものを捉えようとしてきたかに気付く。自と他は全く違うということは、「自分以外は敵である」という古代的なものの考え方に基づいている。他を害することは結局は自分を害することとなる。

現代社会は人口の増大、経済の変化、情報の氾濫により、現実とは刻々と変化している。グローバルなものの考え方、時代の変化を正しく認識し、その上で問題解決の手段を求めることが正しい方法論を導き出すことに繋がる。今は、人間のものの考えと、現実とのギャップを埋める時代にある。

世界には様々な宗教がある。その違いはあるが、愛、慈悲など基礎的な部分では共通するものであり、同じメッセージを持ち、愛や慈悲を育む上で大きな可能性を秘めて重要な役割を担ってきた。

これまでは宗教間におけるものの考え方の違いのみがクローズアップされ、宗教間の争いが繰返されてきたが、違う宗教でもその体験を分かち合う事により、お互いに理解し尊敬し合うことができるはずである。なぜならば、どの宗教でもそれを信じる人に対して役に立ってきたという事実があるからである。宗教相互の理解を進め、人間の内なる資質を高めるということこそが大切であろう。

人は肌の色や髪の色や髪型など外見的な違いこそあれ、基本的土台は全く同じである。修行により悟りを開き仏陀となられた釈尊も私たちと何ら変わらない一人の人間である。仏教は、私というものがどのようなものであるか、自我がどこに存在しているか、自我に始まりがあるのかについて詳しい分析を行ってきた。科学の進展により、物に対する知識は増え、物質面においては、私たちはマクロレベルから素粒子に至るまで非常に詳しい知識を得たが、一方で人間のこころや感情については、きっと仏教者のほうが近代科学者に比べて多くの情報を提供しているだろう。近代科学も、健康のためにはこころの感情をいかに知り、コントロールする必要があるかということに同意している。体のケアにはこころのケアが必須なのである。

科学者は物質の情報を提供し、仏教者は精神的な情報を提供する。この両輪が相互に働くことにより真の健康がもたらされるだろう。

仏教には科学的な面、哲学的な面、儀式修行の面という3つの側面がある。

そのうち科学的な面については、例えばこころの科学であれば、信心をする者に対しても、そうでない者に対しても役に立つ貴重な情報源となる。なぜなら全て相互依存関係にあるという因果の法に基づいていかに感情をコントロールするか、こころの中の破壊的感情を鎮め、より良い感情を高めることができるかという方法論を提供しているからである。

仏教の提供する情報は、科学的な分野、政治、国際関係、環境、全てにおいて、この世の中のもの全てが全て相互依存の深いつながりの関係にあるという非常に重要かつ大切なものの考え方を提示している。このように仏教は21世紀においてすべての人に必要なものの考え方であろう。

仏教的アプローチは慈悲に溢れた人を育てる点でも重要である。それこそが仏教の側からの貢献であり、人間的価値、よき資質である優しさや思いやり、そして宗教の相互理解を促進させるものである。

最後に、皆さんが仏教徒であるならば仏教に基づいた教えを実践して欲しい。さらに修行者であるならば、慈悲の心に基づく菩提心を育むこと、哲学的見解としての縁起を理解し実践をすることの2つを大切にしていきたい。

チベットを中心に各地で起っている大規模デモを中国政府の武装警察が鎮圧し、その際に市民や僧侶に多数の死傷者が出ています。
ダライラマ法王はこれを「文化的虐殺」と表現しました。
一刻も早く平和的な対話がなされ、問題が解決の方向に向かいますことを切に望みます。(亀)

特 集

宗教間対話研究所月例研究会報告

2007年10月～2008年2月

宗教間対話研究所の月例会について、参加者より報告させていただきます。なお、月例会は原則として毎月第3木曜日18時より、曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）で行われています。参加を希望される方は、代表の峯岸正典老師（長楽寺0274-84-2518）までお問合せください。

第5回月例研究会報告（2007年10月18日）

「宗教の呪術性——何が対話を妨げるか」

すが わらのぶ お
菅 原 伸 郎 先生

講師プロフィール：東京医療保健大学教授（宗教教育・比較宗教論）、元朝日新聞学芸部記者、在家佛教協会理事。著書に『宗教をどう教えるか』、『宗教の教科書 12週』などがある。



朝日新聞の記者としてオウム真理教の事件に携わり、その後、国内外の学校現場で宗教教育を取材して回った菅原氏は、特殊な儀礼教育を目にして、宗教間の相互理解の困難さを実感したと言う。宗教間対話においては、狂信者とかカルトといわれる教団とも対話すべきかどうかという問題は避けられないことであるのだが、「呪術性」というものをそのまま受け入れるのではなく、どこかで批判的に見ていく目がないと本当の対話は出来ないのではないかと言っている。

一つの例「穢れと浄め」を広義での呪術性であるが見るが、宗教の本質はそこにはなく、回心や悟りなどの宗教的感動にあるのではないかと見ている。そういう感動を経験した人間にとっては、儀式や呪術的なものなどはどうでもよいことになるのではないかと言うのである。「畏敬の念」あるいは「ヌミノーゼ」、つまり得体の知れないものに対す

る恐れが宗教の本質であると言われることがあるが、この考えは、宗教的実存の受動的主体性の自覚（つまりハッと気がつくこと）こそが宗教の本質であるとする人々により否定されてもいるとのことであった。

最後に宗教的寛容教育の3段階「忍耐・尊敬・学び」と、『浄土論』の「智慧・慈悲・方便」が紹介され、宗教間対話を進めるために他者の価値観や伝統に敬意を持ち、他者との出会いを通じて自分自身の信仰を豊かにすること、神話・方便の真意を読み解く余裕を持つ事などが提言されていた（氏は、キリスト教の「祈り」を内面に光を当てるもの、浄土真宗の「念仏」を報恩感謝の気持ち・絶対帰依を表す言葉であるとして、呪術性との矛盾を「方便も大事」とまとめている）。

宗教間対話においては、呪術性を批判的に見ていく目と、宗教の原点から余裕を持って他の宗教の呪術性を見つめていくという二つの姿勢が必要であるということになるうか。

（の）

第6回月例研究会報告（2007年11月15日）

「国際布教と宗教間対話」

みね ぎし しょう てん
峯 岸 正 典 先生

講師プロフィール：長楽寺住職、宗教間対話研究所所長。

第6回例会での内容は前回会報に同封の『中央評論』拙稿とほぼ重なっている。そこで本稿では国際布教という観点から、宗教間対話について述べてみたい。これまでの経験から〈相手の心の背景がわかっていただ方が、こちらの持っているものを伝えやすい〉ということを感じている。つまり、相手の心の歴史がわかっていると、布教が行き届く。

実は「国際布教の原点としての宗教間対話」というモチーフをずっと抱いてきた。対話を通じて、



異なった宗教的伝統を学ぶということは、その中で生きている人の心を学ぶということである。だから、先方の聞きたいことに答えやすくなる。こちらの言いたいことを言えばよいのではなく、相手の聞きたいことを伝えることが大切な場合が布教には多い。異なった宗教的伝統をなるべく正當に理解したいという熱意が自己の宗教性を的確に伝えやすくする。

宗教間対話ということ自体に、諸々の宗教の共存性が意識されている。だから、はじめから、優劣において一方的な立場に立つことが少ない。相互の尊重がなければ本来対話は成り立たない。したがって異なった宗教的伝統の中に入っていくのに必要な、先方に対して失礼にならない態度と知識が整っていく。

宗教間対話には自分たちのよって立つ基盤をもう一回新たな目で見直させてくれるところがある。異文化の中に入っていくときと同じような見直しが起きやすい。国際布教のよき準備となる。

最後に、教えの優劣ではなく、生き方の浅いか深いかの問題なのだから、宗教間対話などは必要ないという見方も容認しなければならない。但し、真の対話というものは自分のよって立つ立場に自信がなければ出来ないし、また独善的であっても出来ない。だから宗教間対話こそが国際布教の要諦だと言うことも可能と考える。 (峯岸)

第7回月例研究会報告 (2007年12月20日)

「いま対話について考えていること」

な ら や す あ き
奈 良 康 明 先生

講師プロフィール: 駒澤大学名誉教授、駒澤大学前総長

奈良康明先生は、インド学・仏教学の研究者として、僧侶として1967年から始まった「禅とキリスト教懇談会(禅キ懇)」に関わってこられました。禅キ懇は、「救済は教会の中にしかない」として、自ら真理の独占を謳ってきたキリスト教が、エキュメニカル運動を経て、教会のみならず、他の宗教でも真理を説いていることを認め、宗教間対話を始めたことに対応して出発したものです。

ジョン・ヒックが唱えた「宗教多元主義」について(注1)、①排他主義、②包括主義、③多元主義の説明をひとしきりされた後で、どの宗教も同一の真理に拠っていると最初から説くというのはどこか納得がいかず、特に、「多元主義」で、「一つの真理」をどの宗教でも顕現しているというのは、前提としてではなく、対話による相互理解と自己変革の結果として初めて得られるとしました。

禅キ懇では、参加者の立場にかかわらず、全員が順番で皿洗いなどの作務に従事し、対話が行われています。いわゆる「同じ釜の飯を食った仲間」ということでしょう。こ



のことから、対話の4つの種々相(生活・行動・神学的意見・宗教経験)を挙げられた奈良先生は、異なる宗教である以上、最初から意見が通じ合うわけではなく、日本人と外国人の場合には言語の問題などもあるため、まず行動することが肝心であろうとされました。そして、対話は、他宗教

とだけではなく同宗教でも必要であり、仏教でも、大乘仏教と南伝仏教による対話は、今後を考える上で非常に有益であろうとされています。

松原泰道先生の「1人では何もできない。しかしその1人が始めなければ、何も出来ない」という言葉を採り上げられた奈良先生は、まず身近な人への対話から始める「草の根的対話」を主張され、やはりここでも、まず行動するという思いを述べられ、全体を締めくくられました(注2)。最後に聴講者との質疑応答に入りましたが、紙幅の都合上割愛いたします。

注1: 会員の皆様は、S Z I会報36号に同封された『中央評論』261号に収められた峯岸正典老師の「わがこととしての宗教間対話」にも、「宗教多元主義」について触れられていますので、そちらでご確認ください。

注2: 奈良先生におかれましては、本誌巻頭に言葉をお寄せくださいましたので、関連してご参照下さい。

(す)

第8回月例研究会報告 (2008年1月17日)

「宗教間対話へのカトリックからのアプローチ」

に か い む ね と
二 階 宗 人 先生

講師プロフィール: NHK報道局記者及びロンドン、パリ、ジュネーブ、ローマ各国の常駐特派員、国際企画部長を経てヨーロッパ総局長。20年あまりバチカン取材。昨年よりNHK情報ネットワークで国際事業を総括。

二階氏は、ローマ教皇庁がこれまでに公刊してきた膨大な公式文書の中から特に宗教間対話に触れたものを取り上げ、その大きな流れと歴史的な意義、諸宗教との対話に果たした役割について講演されました。

(1) 諸宗教との対話の変遷

教皇パウロ6世が対話の大憲章ともいわれる勸告的回軸



『エクレジウム・スラム』を発表した1964年は、キューバ危機を経験し米軍によるベトナム北爆が予兆される時代であった。教会史上1世紀ぶりに開かれた公会議の第2パチカン公会議は『現代世界憲章』をはじめとする4つの基本文書を公刊し、カトリック教会のその後を大きく方向転換させた。しかし、対話を決定付けたのは『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』と名付けられた公会議文書であり、カトリックは諸宗教との対話に大きく踏み出した。

その基本路線を継承した前教皇ヨハネ・パウロ2世は回勅『人間のあがない主』で諸宗教との対話政策を明示化し、次の『救い主の使命』で発展させた。イタリアのアッシジに諸宗教の代表を糾合して開いた祈りの集いはその具体化の第一歩であった。1991年の教皇庁文書『対話と宣言』が対話の結果として「自分の宗教的立場をやめる」回心にまで言及した点は注目される。

しかし、21世紀に入ると教皇の健康問題と連動するかのよう、対話以上に「キリストの宣言」を強調した教義重視の姿勢が見え始める。現教皇ベネディクト16世はトルコを訪問したほか、昨年ナポリで開催された世界宗教者平和の祈りの集いにも出席した。諸宗教との対話路線に変更はないとはいえ、過去半世紀を俯瞰すると教皇庁の軸足が「包括主義」から「多元主義」へ、そしていま再び「包括主義」へと移っているかのようにみえることが注目される。

(2) 課題としての諸宗教間対話におけるメディアの役割

公会議文書『広報機関に関する教令』、教皇庁文書『コミュニケーション分野におけるエキュメニズムおよび諸宗教間の協力に関する基準』等を参照しながら、メディアが宗教間対話にどのような役割を果たすことが出来るのかを概括し、今後の研究課題を提起した。(あ)

第9回月例研究会報告(2008年2月21日)

多民族国家マレーシアで見たタイ仏教寺院 —「異文化理解」より「他者了解」を—

これ つね けい すけ
此 経 啓 助 先生

講師プロフィール: 日大芸術学部教授・同学部大学院文



芸学専攻教授・宗教考現学研究所主宰。主著に『明治人のお葬式』『都会のお葬式』『仏教カテスト』、論文に「明治時代の文化政策と宗教政策—公営墓地の誕生—」「神道式墳墓とは何か」他多数。

一連の現地調査(注)から、特にタイとマレーシアの国境地域における仏教事情の紹介がなされた。マレーシア側では、寺院の建築様式に華人的感性による装飾が増えたり、英語で書かれた先祖供養の解説本が置かれたり、信者以外の華人やムスリムもタイ人僧侶の医療や占術をうけたりする変化が見られたという。さらに、タイの西海岸・東海岸(いずれも村落)、マレーシアのコタバル(村落)・ペナン(都市)の4地域をとりあげ、それぞれに住むタイ人仏教徒・華人仏教徒・タイ人ムスリム、マレー人ムスリムというエスニシティ(民族・宗教・言語など)の組み合わせにより、該当地域に宗教者や信者がどの程度いるかの分析を行い、コタバルの仏教徒とムスリムが平和に共存しているケースを紹介したが、例えば、寺院の祭礼や影絵芝居・舞踊劇等の行事を他宗教の地元住民に開放したりするなど、そこでの共存とは、「異文化理解」の「異」の部分から一歩抜け出したものだと考えられる。「他者了解」とは、「異文化理解」よりも差別的眼差しがなく、自己と他者を同時に解放しつつ相手の信仰と慣習を尊重する謙虚な姿勢で、タイ人仏教徒がムスリムに対して最も優先していることのようなうだ。

一方、今回の研究会に参加した仏教徒の方が、かつてキリスト教徒の方との対話を洗礼なしに受け容れられた時の安堵を述べたことや、またある方がジャワ島津波の際、キリスト教徒へ援助がムスリムと公平に行われたかという不安を述べたことに、そもそも宗教に日常生活や現実の諸問題を変える力があるのか、という課題が垣間見えた。「他者了解」が「自己と他者の「境界」に立つ宗教間対話」とすれば、宗教そのものを「人々の暮らしにあるもの」として読み解いていく視点がなくては、これからの草の根の宗教間対話は難しくなるだろう。

(注) S Z I 会報36号24～26頁「東南アジアの中のタイ仏教」参照。(う)

訃 報

既報の如く、曹洞宗管長、大本山永平寺七十八世貫首、宮崎奕保禪師様におかれましては、去る1月5日早暁、昨年末より加療中であった札幌市内の病院で御遷化あそばされました。

1月7日、御遺体は、侍局一行に伴われて、陸路、北海道より永平寺に御帰山され、11日、大本山永平寺にて密葬の儀がしめやかに営まれました。新貫首となられた福山諦法不老閣猊下が秉炬の仏事をお勤めになり、全国から参集した寺院およそ500名、一般弔問者300名が、茶寿（百八歳）を迎えたばかりであられた故禪師様の尊いお姿に無言のお別れを告げました。また、北米、南米、ヨーロッパなど各国

際布教総監部の総監はじめ職員もはるばる海外から駆けつけ、御真前に焼香されました。

故禪師様は平成14年の高祖大師七五〇回大遠忌に際し、史上初めて北米、ヨーロッパ、ハワイなど、海外から焼香師を招き、その随伴者一行にもそれぞれ親しく御相見、御垂示なさいました。現代に生きる只管打坐の指標として、世界の禅修行者から仰がれていたことを物語るように、各国の寺院、禅センターより、故禪師様の御功績を称え、御遷化を悼む弔電が多数寄せられました。

ここに謹んで哀悼の意を捧げ、御生前の尊いお導きと深い御恩に感謝申し上げます。

慕古真心 不離叢林
末後端的 坐断而今
遺 偈



大本山永平寺七十八世 宮崎奕保禪師 御遺影



唐門を出て茶毘に向かう葬列

海外「宗立専門僧堂」について

会報36号（07年12月発行）に掲載された「海外宗立専門僧堂が禅道尼苑に開単」という記事で、昨年9月から3ヵ月間、フランスの禅道尼苑に設置された海外の宗立専門僧堂（堂頭：今村源宗老師、堂監：秋山洞禪老師）についての言及がありました。ところが、その文章内容に不備が見られたようですので、改めて説明文を掲載することにいたしました。

昨年、開単された海外の宗立専門僧堂については、海外における伝道師及び伝道教師の資格が平成19年7月1日に停止され、「曹洞宗僧侶教師分限規程」に定める資格への移行措置に関連して設置されるようになった機関です。従来海外の伝道師及び伝道教師は、海外僧侶であって、本山僧堂等に掛搭できなかったのですが、この度、国内外の資格上の相違を停止し、従来の海外僧侶は各国際布教総監部に僧籍を置くことで、日本の宗侶の位置付けと同じになりました。

その際、規程に従えば、教師資格を取得するために一定

期間の安居等を要しますが、既に海外にて活動されている海外僧侶の利便性などを考え、昨年から海外で3ヵ月ずつの「宗立専門僧堂」を設置することになっています。本年もフランス禅道尼苑にて開設が予定されておりますが、今後においては未定であり、随時検討していくとのことです。

安居期間は、海外僧侶自身の経歴に依存しており、「分限規程」第3節の日本での資格取得時と違いはないとのことです。つまり、教師資格を取得しようとする場合には、今回の3ヵ月だけで終わる人も少しはいるかもしれませんが、多くの場合は安居は最低半年～1年になりますので、海外の宗立専門僧堂が毎回3ヵ月ずつの開単ということであれば、合計2回から4回ほど安居することになります。

なお、今回の海外僧侶の資格移行に伴う『宗制』の条文等は、『曹洞宗報』07年10月号の125～134頁に詳細が出ておりますので、併せてご参照ください。

国内インフォメーション

元開教師・国際布教師OB親睦会開催

去る2007年12月18日、あたま百万石に於いて、役員会と同時進行の形式でOB会設立準備会が開催された。

今回の準備会は福島会長の発案呼びかけによるもので、SZI 15周年の一環として本会の更なる向上と親睦を願い、「元海外開教師経験者を中心に海外研修・体験された方々との交流親睦を計り、その経験を更に活かしSOTO禅インターナショナルをサポートする任意団体として発足する。本会は宗務庁並びに各地区に於ける国際布教のパイプ役と啓蒙に努める。年に一度交流会を設ける」を旨に案内した。

当日は、SZI役員はじめ元開教師・海外開教関係者21名が、北は北海道から南は九州より熱海に集結し、久しぶりの再会に喜びを新たにした。

早速会議が開かれ、提案事項に関する討議が行われた。会議に先立ち、福島会長の挨拶があった。また、本件の議長として細川副会長により選出議事が進行された。

次に提案事項の説明があり、同案の審議が行われた。各参加者の意見として、今回のOB会発足に関する提案は、SZIと同じ性格の会を作ることになり、発足提案の趣旨は理解出来るものの、その意味付けを明確にしてから、必要であれば再審議してはどうかとの意見が多数であった。

そして当面は親睦会形式で行っていくこととし、終了した。

なお、来年度開催予定地は福島県、再来年度は大分県、その翌年は新潟県等で再会を約束し散会した。

準備会開催にあたり、今回多くのOB、関係者から励ましの言葉と、たくさんの添葉を頂戴しました。この紙面を借りて御礼申し上げる次第です。また、今回参加できなかったOB、関係者の方々には次回開催の折には是非とも御参加下さいますようお願い申し上げます。



塔婆供養で植林支援

1本の塔婆供養で、1本の樹木が育ちます



SOTO禅インターナショナル（SZI）は創立15周年記念事業の実践として「塔婆で植林」プロジェクトを提案します。

仕組みは簡単です。ご寺院様で使われる卒塔婆の本数に合わせて、1本当たり30円の環境義捐金を同封の郵便振替用紙を使ってSZIにお送り下さい。

SZIからは、その本数分の「環境貢献シール」と掲示用のポスターを御寺院様にお届けいたします。

各御寺院様におかれましては、法要の際に通常の「塔婆」と一緒に「環境貢献シール」を施主様にお渡し下さい。

なお、環境義捐金はNPOを通じてシール1枚当たり1本の植林に役立てられます。

一人ひとりが出来ることからやっこ。——それが曹洞宗の、そしてSZIの「塔婆供養で植林支援」というグリーン・プランの実践です。

詳しくは同封の案内状をご参照ください。

SZI express

..... 総会・懇親会、お疲れ様でございました。



SZI ホームページ 運 営 中

会報バックナンバー、過去の総会・講演会、
スタッフページなどもご覧いただけます。

URL <http://soto-zen.net>

会費納入者・賛助金納入者名簿 2007年11月1日～2008年2月27日まで

◆SZI 会費賛助金納入者一覧 2007年11月1日～2008年2月27日

ありがとうございました。
大切に使用させていただきます。
(敬称略・順不同)

■ 会費納入者芳名一覧

秋田県	樹温寺	佐々木俊明
宮城県	天雄寺	
埼玉県	秀源寺	桐田直樹
群馬県	龍源寺	渡辺龍道
千葉県	瑞岩寺	伊藤仁志
神奈川県	曹源寺	橋本大心
神奈川県	善光寺	黒田博志

静岡県	慶昌院	磯田浩一
滋賀県	慈眼院	松浦泰俊
石川県	崇禅寺	三香美成子
石川県	長久寺	星野邦

■ 賛助金納入者芳名一覧

曹洞宗宗務庁 (15周年記念特別賛助)

動 静 報 告

2007年12月20日～2008年3月31日まで

2007年

12月27日 会報発送作業 事務局

2008年

1月8日 役員会・編集会議 檀信徒会館

1月17日 宗教間対話月例会 檀信徒会館

2月8日 会計事務局会 東京

2月20日 役員会・総会・記念講演会 檀信徒会館

2月21日 編集会議・宗教間対話月例会 檀信徒会館

3月10日 役員会

3月26日 編集会議 檀信徒会館

3月27日 編纂委員会 埼玉

宗教間対話月例会 檀信徒会館
インターネットにて随時役員会を開催しています。

編集 後記



窓の外の雪を横目に原稿整理を始めた今号でございますが、これが皆様の手に渡る頃には、日本中に穏やかな春の風が吹き渡っていることでしょう。総会では、新役員としてご承認いただき、ありがとうございました。国際布教のお手伝いができることを、とても光栄に思っております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

(さとうのり)

【訂正とお詫び】

会報36号10ページにありました記事で、小島秀明師のルビが「こじま しゅうめい」とあるのは「こじま しゅうみょう」、また、12ページに「フランス幸雲」とあるのは「フランツ幸雲」の誤りです。訂正しまして、お詫び申し上げます。

キャンドルナイト in 大船観音

<http://candle-night.org>
<http://soto-zen.net/candle>

Turn off the lights, and take it slow.
「電気を消して、スローな夜を・・・」

【日 程】 2008年5月19日（月）

2008年6月22日（日）

※雨天の場合は事務所内と周辺のディスプレイのみ。

【時 間】 17:30 ~ 21:00

【料 金】 500円（献灯代が含まれます）

【場 所】 大船観音寺

鎌倉市岡本1-5-3 / JR大船駅西口から徒歩10分

Tel : 0467-43-1561

【主 催】 ゆめ観音実行委員会

S Z I 創立15周年記念 シンポジウムの お知らせ

日 程 2008年6月19日（木）
午後13時30分より

場 所 檀信徒会館 桜の間にて

テーマ 「世界の曹洞禅」
～禅の果たす社会的役割～

■ 基調講演 奈良康明先生

1929年千葉県生まれ。東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業。カルリッタ大学大学院人文科学研究科博士課程修了。駒澤大学教授、同学長、同総長を歴任。現在、駒澤大学名誉教授。著書『仏教史1ーインド・東南アジア』（山川出版社）、『釈尊との対話』（日本放送出版協会）、『観音経講義』『仏教と人間』（東京書籍）他、多数

■ シンポジウム提言者

オコナー洞燃伝道教師（米国・ミルウォーキー禅センター主管）
ピッチ大樹国際布教師（ブラジル・イピラス禅光寺）
クサノ宗禅国際布教師（ノルウェー・武覚寺）

■ コーディネーター ダンカン・隆賢・ウィリアムス先生
(Associate Professor of Japanese Buddhism;
UCBerkeley)

両大本山ワークショップ（講演会）のご案内

・大本山總持寺

日 時 6月16日（月）午後2時30分～
会 場 大本山總持寺（JR京浜東北線鶴見駅下車5分）
三松閣 四階大講堂（どなたでも聴講可能です）
講 師 ダンカン・隆賢・ウィリアムス先生

・大本山永平寺

日 時 6月20日（金）午後6時30分～（内講にて）
会 場 大本山永平寺
講師は總持寺と同じです（内講のため、修行僧のみ）